

熊本地震 JDA-DAT 大阪出動

JDA-DAT大阪スタッフ 星庵 史典



平成 28 年 4 月 14 日に、熊本県熊本地方等で発生した地震における日本栄養士会災害支援チーム (JDA-DAT: The Japan Dietetic Association-Disaster Assistance Team) として災害支援を行いました。

15 日に熊本県栄養士会熊本地震災害支援本部設置、日本栄養士会としての 4 月 17 日 (日) から先遣隊が派遣。大阪府の JDA-DAT へは 23 日 (金) から召集が開始され、私は 24 日 (日) 夜に夜行バスで出発、25 日 (月) から 28 日 (木) まで活動いたしました。到着時点では、すでに九州の各県の支援チームが熊本の各地域を分担し支援している状態でした。

災害支援チームは主に

- ・各避難所の栄養状態の把握、課題解決
- ・医療班との帯同
- ・介護食、アレルギー除去食等、特殊栄養食品の手配

など行政栄養士の支援を行っており、私は県庁に設置された特殊栄養食品ステーションの任務を担いました。

特殊栄養食品ステーションは離乳食、介護食、アレルギー除去食など炊き出し等では対応しにくい食品を熊本県・日本栄養士会・熊本県栄養士会・日本小児アレルギー学会から提供を受けて、把握をし、必要な箇所に分配するのが目的で設置されます。2015 年の鬼怒川・小貝川下流域大規模氾濫を契機にはじめて設置され、今回の熊本地震においても熊本県庁を拠点に設置されました。

災害時には各調達によって提供方法、配送方法、在庫管理方法などが異なる物資を行政栄養士が行うのは困難であるため、JDA-DAT がこの部分を支援するために設置されます。

被災地には全国から支援物資が届きます。しかしながら、届く物資は必ずしも普段から目にする商品とは限りません。ダンボールには商品名だけが書いてあるものも届きます。名前を聞いても何ヶ月の赤ちゃん用なのか、どのアレルギーに対応するのか、どれくらいのやわらかさなのかなどわからない面もあります。物資は届いているが、行政の職員ではよくわからないのでダンボールを開けていないという状態が各避難所で起こっていました。

JDA-DAT や特殊食品ステーションで栄養士が把握、手配管理する必要性を感じました。

基本的には

- ・朝のミーティング (県栄養士会)
- ・特殊食品ステーション対応 (県庁)
- ・夕方のミーティング (県栄養士会)

を繰り返します。朝のミーティングでは、各県からはじめての方が必ずくるのでステーションの説明を行い、当日の配送スケジュールなどの調整を行います。ステーションでは倉庫への受け入れ、栄養士会との物資の配送手配、行政栄養士と受け入れ先の人手の調整などを行います。宿舎は熊本県の栄養士さんが自宅を支援チームに貸していただき、十数名で寝泊りをしていました。災害の支援には教育機関、行政、病院、研究機関、給食施設、フリーランスなどさまざまな栄養士が集まります。集まった人たちが知恵を出し合い、チームが成長していくのを感じました。宿舎では各都道府県からの支援に来た人たちで、情報交換や日ごとの業務などについても話す機会が有り現在でも情報交換を行っています。現地では、研修を受けていない方も支援をしています。しかし研修を受けた人との差というのを感じます。支援に行くかどうかは別にしても、JDA-DAT 研修を受けていてよかったと感じます。まず、研修を受けていなければ、支援に行くことはなかったと思います。

スタッフ研修を受ける前は、被災地での栄養支援は、各避難所で栄養相談や状況の把握を行うことだと考えていました。しかしながら研修と今回の活動で、行政の栄養士を支援するという考え方の大切さと後方支援の大切さを感じました。

災害によって支援のありかたは変わりますが、あくまでも支援であり、ニーズを大切にすることをお忘れずにいることが大事だと今は感じています。今後はリーダー研修を受けさらにスキルを磨きたいと思います。

